

研究協力報告書

障害福祉サービス等事業者における高次脳機能障害者への支援の実態把握及び推進のための研究
＜高次脳機能障害支援養成研修の都道府県（愛知県）での実施状況と
他県ヒアリングを通して＞

研究分担者 鈴木 智敦：名古屋市総合リハビリテーションセンター 副センター長

研究協力者 小島 一郎：名古屋市総合リハビリテーションセンター 総合相談部長

◎佐野 恭子：名古屋市総合リハビリテーションセンター 高次脳機能障害者支援課長

研究要旨

本研究は、2020～2022年度の厚生労働科学研究により開発された「高次脳機能障害支援養成研修（基礎編・実践編）」が2024年度より全国展開されたことを踏まえ、都道府県における研修運営の実態と課題を明らかにすることを目的とした。愛知県における2024・2025年度の研修を対象に、アンケートおよび運営記録を用いた後方視的調査を行うとともに、先行して実施している4都道府県へのヒアリング調査を実施した。

各都道府県とも集合形式を基本とし、支援拠点機関のコーディネーターがファシリテーターとして参画することで、地域連携の強化や拠点機能の周知に一定の効果が認められた。一方、受講者の多くは福祉職であり、高次脳機能障害の支援経験が少ない層の増加が確認された。特に基礎編では、神経心理学的検査や失語症、注意障害等に関する医学的講義において「専門用語が難しい」との回答が一定数みられた。また、検査体験演習では、評価結果と生活場面における困難との関連が具体的にイメージしにくいとの意見があった。実践編では、障害特性別の対応方法を扱うロールプレイ演習について、「議論や振り返りの時間が十分でない」「事例理解に時間を要し、対応策の検討が十分に深まらない」との指摘がみられた。

これらを踏まえ、愛知県では事例の共通化や解説内容の具体化を図った結果、演習理解度の向上が認められた。しかしながら、支援経験の少ない受講者に配慮した用語解説の充実や事前学習の工夫、演習時間の再配分といった課題は引き続き残されている。

今後は、障害特性別の具体的な対応方法の内容をさらに精査し、医療情報と福祉情報のバランスを調整するとともに、フォローアップ研修を含む継続的な学習体制の構築が求められる。これらの知見は、今後の各都道府県における研修内容の均てん化および質の向上に向けた検討資料となるものと考えられる。

A. 研究目的

高次脳機能障害の特性に応じた支援ができる専門性を持つ人材を養成・確保するため、2020～2022年度（R2～R4）の厚生労働科学研究補助金において「高次脳機能障害の特性に応じた支援者養成研修カリキュラム及びテキストの開発のための研究」（深津玲子他）が実施された。

2024年度より、上記成果は「高次脳機能障害支援養成研修（基礎編・実践編）」（以下養成研修）として、その研修の受講が、一部の障害福祉サー

ビスの報酬の加算要件に位置付けられ、全国各都道府県において養成研修が実施されることとなった。

しかしながら、各都道府県においてこの標準カリキュラムに沿った養成研修を実施するにあたり、受講する対象者像やその支援経験、また、養成研修を実施する側の人材等を含めた運営体制等々について、十分に整理されていない状況であった。

そのため、愛知県での2024年度の実施、それ

を踏まえた 2025 年度での取り組みでの工夫、気づき等について調査する。あわせて、すでに高次脳機能障害支援養成研修（基礎編・実践編）を実施している都道府県へのヒアリングを行い地域の実情を含めた養成研修の研修内容や運営方法等の差異について調査する。

B. 研究方法

愛知県で実施した 2024 年度及び 2025 年度に実施した高次脳機能障害支援養成研修（基礎編・実践編）を対象として、研修終了後に研修内容及び方法等を研修終了後に回収されたアンケート結果および運営記録を用いて、後方視的に調査

した。また、すでに高次脳機能障害支援養成研修（基礎編・実践編）を実施している都道府県の中から、調査協力の得られた全国 4 都道府県に対して、対面またはオンラインによるヒアリング調査を行った。

C. 調査結果及び考察

1. 運営面と受講者像

(1) 愛知県での運営体制

2024 年度及び 2025 年度における愛知県での運営体制は、表 1 の通りであった。2024 年度から 2025 年度で変更した点は、会場規模の拡大、テキスト、外部講師及びファシリテーターの増員であった。

表 1 愛知県での運営体制

	2024 年度	2025 年度	変更点	
運営方式	委託	委託		
日数	基礎・実践 2 日ずつ	基礎・実践 2 日ずつ		
会場	有料	有料	★	会場規模拡大
定員（応募）	63 人（160 人）	60 人（201 人）		（）申込者数
	経験年数・人数で選定	経験年数・人数で選定		
受講者所属*	相談 ^{*1} ：日中 ^{*2} ＝5：3	相談：日中＝6：4		
講義	対面（基礎・実践 2 科目ずつオンデマンド事前学習）	同左		
演習	対面	対面		
テキスト	基礎のみ白黒 実践：カラー	基礎・実践：カラー	★	
講義講師	基礎 6 名 実践 7 名 （うち外部 2 名）	基礎 6 名 実践 7 名 （うち外部 2 名）	★	外部講師および FT 増員
演習講師	基礎 4 名 実践 2 名	基礎 4 名 実践 3 名 （うち外部 1 名）		
FT ^{*3}	9 人（うち外部 3 人）	10 人（うち外部 5 人）		
修了者リスト	R7 に作成予定	作成予定		FT7:1→6:1 へ

*1 相談：相談支援事業所

*2 日中：就労移行支援、就労継続 A・B、共同生活援助、生活介護、施設入所支援

*3 FT：ファシリテーター

(2) 全国 4 都道府県の運営の特徴

・千葉…基礎編・実践編の演習をまとめて 3 日で実施（2025 年度は 2 クール実施）。講義はオンデマンド事前学習でレポート提出。ファシリテーター（以下、FT とする）は県内の支援拠点機関スタッフから輩出。

・静岡…県作業療法士会が受託。参加費徴収。102 名参加。参加者の 9 割が相談支援専門員。地域格差を最小限にするため、受講者は圏域ごとに定員を割り振った。講義は e-ラーニング使用（講義後のテストあり）。FT は 2 グループに 1 名配置、県内支援拠点機関のコーディネーター

が主に担当。支援ネットワーク会議への参加を応募要項に記載することも検討。

- ・大分…2024年度は集合形式をとりつつ、講義部分は動画を見たところ、受講者の参加態度に課題があったため、2025年度は対面での講義に変更し、オンデマンドでの事前学習も実施せず。FTは2グループに1名配置、支援拠点機関の属する法人職員のみで担当。
- ・岐阜…FTは1グループに1名、圏域コーディネーターを配置し、関係性構築を図った。講師は支援拠点機関のコーディネーターが単独で担当したが、今後は地域のコーディネーターで分担していく方向性。

(3) 考察

各都道府県において、集合形式で実施し、支援拠点機関のコーディネーターが中心となってファシリテーターとして参画することにより、コーディネーター間の連携強化や支援拠点機関の周知・広報につながっている。一方で、フォローアップ研修等の必要性は認識されているものの、実施の可否については現時点では未定である。

今後、回を重ねるにつれて、参加者に占める相談支援専門員の割合が高まる可能性があり、高次脳機能障害者支援の経験が少ない受講者の増加も見込まれる。そのため、参加者像の変化に応じて、研修内容や方法の見直し、工夫等が求められる可能性が高い。

また、ファシリテーターは受講者の参加状況を把握しながら、将来的な地域連携を見据えた人材の発掘・育成という役割も担うことができる。この観点から、1グループにつき1名以上の配置が理想的である（相談支援専門員向け研修では、1グループ6名に対してファシリテーター1名の配置が推奨されている）。さらに、基幹相談支援センターの相談員や圏域・地域アドバイザー等、基幹の相談支援を担う受講者に対し、翌年度のファシリテーターや講師としての参画を依頼していくことは、有効な方策であると考えられる。

2. 講義・演習内容

(1) 受講者アンケート結果のクロス集計

受講者に対してこれまでの高次脳機能障害者の支援経験人数を調査した。支援経験の人数による養成研修受講の影響について、支援経験多群（4人以上：「4～9人」「10人以上」）と支援経験少群（3人以下：「1人」「2～3人」）に分けてクロス集計した。2024年度の結果を踏まえ2025年度の研修を工夫した。

◆2024年度基礎

- ・支援経験が少ないほど対面開催のメリットを享受している可能性がある。
- ・診断評価、失語症など医学的内容の方が印象に残りやすい。
- ・自立訓練の演習も印象に残りやすい。
- ・支援経験少群では、専門用語の難しさを感じている。支援経験に関わらず、具体的な事例を求める声が多い。
- ・支援経験少群では、約半数強が支援拠点機関の存在を知らなかった。
- ・支援経験少群に対する支援拠点の役割明示、フォローアップの必要性

◆2024年度実践

- ・認知症・発達障害との違いについては、高次脳機能障害の支援経験問わず関心が高い。
- ・演習 01「障害特性の理解と対応方法」は時間数に対し、印象に残りづらい。
- ・実践研修ではより実践的なポイントや事例を求める声が多い
- ・支援経験少群は、基礎・実践ともに「時間が短い」＝情報負荷が高い可能性
- ・基礎研修の内容は活かされている。

(2) 2025年度に変更・工夫したこと

【講義】

- ・大きな変更はないが、国リハテキストをベースに、一部地域性を反映するなどの追加的改訂をした。

- ・参加者の85%が高次脳支援経験人数は10人未満であることを鑑みて、全体に理解がしやすいよう、各講師が専門用語や説明に配慮しつつ講義した。どの講義も受講者の理解度は上がっていた。

【演習】

- ・グループ分けについて、事業所の所在地が近い圏域の出身者を固めるパターンと逆のパターンを基礎、実践で変更して実施。様々な事例や社会資源情報を知られるということで、非近隣エリアでのグループ分けの方が活発な意見交換がされた印象。一方、近隣エリアでのグループ化は、研修終了後のネットワーク化への工夫がしやすい。
- ・基礎の演習01「診断・評価体験」について、2024年度受講者から難しいという意見が多かったが、年代平均やカットオフ値等の案内を提示し、ほぼ個人ワークにした。
- ・基礎の演習03「自立訓練の実際」については、グループでの議論の的を絞った。また、演習01～04で利用する事例を共通にして、イメージ化、理解促進を狙った。しかし反面、多くの事例を紹介しづらくなるため、実践経験の豊富な医師から演習内で事例を紹介してもらうことで補完した。
- ・実践の演習01「障害特性の理解と対応方法(ロールプレイ)」についても、演習2と共通事例とし、取り組み易くした。

(3) 2025年度受講者アンケート結果

2024年度の受講者数は支援経験多(4人以上)群と支援経験少(3人以下)群が1:1だったのに対し、2025年度では1:2と変化しており、今後も支援経験の少ない受講者が徐々に増えていく可能性がある。

それゆえ単純比較しづらいが、興味や理解度等について概ね傾向は変わらなかった。2024年度と比較して講義以上に演習の理解度は全般に向上していた。大半が福祉職である受講者にとって、比較的学习機会の少ない医療的情報は、理解が難しいものの、感想としては好評で理解度

が上がったと自己認識されていた。

(4) 他県での研修内容

- ・千葉…地域の支援体制、当事者・家族からのメッセージ等を盛り込むため、一部講義を追加したり、時間を拡大するなど、計140分追加して受講者の理解促進を図った。特に当事者インタビューは好評だった。一部演習では事前の事例読込や設定を事務局で明確化するにことにより効率的に実施しつつ、ポイントを絞って理解を促した。
- ・静岡…基礎・実践で講義を2つ計70分追加したり、演習で家族会による講義を含めるなどし、地域の実情反映させた。
- ・大分…講師判断でシラバスに沿って内容変更したり、地域事情を反映させた講義も一部あり。内容的には難しかったという意見や、ボリュームが多すぎるといった意見が聞かれた。
- ・岐阜…地域の支援体制について、講義に含めたり資料を配布することで啓発の機会とした。配布されたパッケージ資料の内容と国リハの指導者養成研修の講義内容にズレがあり、困惑したが、事前の打ち合わせで調整した。今後も各種制度変更等があり得るが、パッケージ資料の更新がされるのか疑問に感じている。

(5) 考察

愛知県を含め、各県においては、会場や講師の確保、募集要項の設定など、研修運営そのものについて試行錯誤を重ねている状況にあり、十分な余力があるとは言い難いと考えられた。一方で、講義内容については、地域の実情に応じた内容を追加したり、講師構成を工夫したりするなど、各県において主体的な取り組みがなされていた。とりわけ、高次脳機能障害支援の初学者にも理解しやすいよう、動画の活用や当事者・家族会の登壇は有効であると考えられる。

また、集合形式で講義を実施しない場合には

テキスト配布は必ずしも必要ではないとも考えられるが、研修内容の情報量の多さを踏まえると、事後学習や研修修了者の所属法人内での活用を目的として、当面はカラーによるテキスト配布を継続したい。

さらに、「障害特性別の対応方法の実践」に関する内容をより充実させるため、基礎演習 01 および 03 に組み入れることも一案であると考えている（表 2）。

参加者の大半が福祉職である現状を踏まえると、医療情報と福祉情報の比率を調整し、地域の

事業所が支援実践において必要とする科目を重点化することが望ましいのではないかと。また、演習での議論に十分な時間を確保できるよう、全体の設定時間や内容構成の整理も必要であると考えられる。

加えて、支援経験が少ない群においては、2024 年度および 2025 年度のいずれにおいても、支援拠点機関の存在を知らなかった者が 50%以上を占めており、広報・啓発のさらなる充実の必要性が示唆された。

表 2 シラバス変更案

	講義名	到達目標	内容
現行	演習 01「障害特性の理解;診断・評価体験」	高次脳機能障害の診断に用いられる評価を体験し理解する。	下位検査を体験し、検査上の異常について理解する。
案	同上	高次脳機能障害の診断に用いられる評価を体験し、 <u>障害特性ごとの対応方法について理解する。</u>	下位検査を体験し、 <u>検査結果を通して障害特性を理解する。また社会生活上予想される障害特性毎の対応方法について、演習を通して理解する。</u>
現行	演習 03「生活訓練の実際」	具体的な事例を通して、生活訓練における支援の実際を理解する。	生活課題のある就労を目指す事例を通して、生活訓練における「目標設定」「計画立案」「訓練項目及び内容」「調整項目及び内容」「他機関との連携」等の要点を理解する。
案	演習 03「 <u>自立訓練の実際</u> 」	具体的な事例を通して、 <u>自立訓練における支援の実際</u> を理解する。	生活課題のある就労を目指す事例を通して、「 <u>自立訓練を通して見られる生活および就労上あらわれる課題のアセスメント</u> 」「 <u>適切な支援方法や方向性</u> の見立て」「 <u>社会参加に向けた調整</u> 」等の要点を理解する。

D. まとめ（2026 年度の愛知県版の実施イメージ）

- ・運営面では、引き続き講義も含めて基本的に集合形式で実施し、支援拠点機関の広報や地域の支援者との関係強化につなげる。
- ・内容面では、支援の具体的なイメージが持てて、様々な障害福祉サービスにおいて汎用性のある内容を目指す。動画を使用したり、当事者もしくは家族の講義により、障害像の理解促進を図り、演習の内容・難易度に引き続き配慮す

る。応募要項に内容面の記載を追記したり、参考資料・文献や研修案内に記載することで、集合での研修参加時にスムーズに内容理解ができるよう事前の自主学習を促す。

- ・基礎編→【障害特性別の対応方法の実践】に関する内容を追加するため、演習 01 や 03 に組み入れる。
- ・実践編→他研修（ミニセミナー等）で実施している講義 02「小児期における支援」・03C「コミュニケーション支援」・03E「自動車運転再開

支援」はオンデマンド事前学習に変更し、講義02B「長期経過とフォローアップ」・03A「チームアプローチの重要」・03B「家族(きょうだい)支援・当事者家族会の活動」を対面に変更する。

- ・フォローアップ研修・・・2024年度・2025年度の研修修了者に対して定期的にフォローアップ研修を実施し、実践場面での困りごとに対して、事例検討や質疑応答などでスキルアップを図り、支援拠点機関との連携を深める。より実践に近い支援イメージのため、地域の医療機関職員も含めた症例検討会を同時開催。
- ・また、修了者の所属する事業所をリスト化して、既存の支援機関マップに追加する形で作成する。

E. 今後に向けて

各都道府県において、高次脳機能障害支援養成研修(基礎編・実践編)が動き始めた。各都道府県、その地域の実情に応じて創意工夫も行われ、必要に応じて追加の研修も盛り込まれている。しかしながら、これらの工夫がされているような内容や追加している研修が基礎研修や実践研修において、本来、含まれているべき内容でなければならないことも考えられる。また、高次脳機能障害者支援法が成立したことにより、制度的な講義や地域展開・ネットワークづくり等その機能や役割、影響による内容を含める必要がある。特に、地域展開・ネットワークづくりについては、高次脳機能障害の特性や支援方法の理解に留まらず、いかにそれらを踏まえた仕組みを地域に定着させられるかを受講者が主体的に検討していく姿勢を促すことが求められる。

また、基礎編と実践編における受講者像の違いや、基礎編修了から実践編受講までの期間が明確に示されていないため、その運用は都道府県ごとに異なっていると考えられる。これらの差異は、研修の難易度や内容にも影響を及ぼしている可能性がある。

さらには、研修実施から2年間ではあるが、相談支援事業所と他の日中サービスの事業所の受

講者数の差は、愛知県で5対3から6対4へ、静岡県では9対1となっている。住み慣れた地域に必要なサービスを受けるためには、日中サービス事業者の受講、理解が必要不可欠であるが、制度上のインセンティブ等も関係していると考えられるが、早めに検証し対策を講じる必要がある。

そのためには、全国各都道府県での実施状況やアンケート内容、講義や演習内容の工夫を含めた情報交換等の機会、早い段階での内容を含めた実態把握と検証(PDCA)が必要であり、厚生労働科学研究費補助金や障害者総合福祉推進事業などの実施・継続が重要と考える。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

- ・論文発表
なし
- ・学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・取得状況

なし

